

このように鎌倉時代から江戸時代にかけて『医説』が受容され、医学・文学や関連領域にまで及ぼした影響は相当に大きい。また江戸後期になると小島尚質や奈須恒徳らにより、本書の詳細な校勘研究も行われていた。それらは従来の医史学研究で等閑視されていた分野および視点といつていい。

当書はそうした様子を伝えるために、奈須恒徳らによる書き入れを含め、和刻本の訓点や送り仮名までを克明に翻字している。その労は賞賛に値する。当書の刊行によりユニークな中国医史に富み、また日本医史にも関連する本書が、今後は容易に研究利用できるようになった。当書が日本の伝承文学資料集成の一環として出版されたためか、およそ斯界では知られていなかった。それゆえ五年前の出版に対して遅きに失した誹りを免れ得ないが、当書の価値からあえて紹介に取り上げた次第である。

(真柳 誠)

〔三弥井書店、東京都港区三田三二―二三九、A五判、総三九〇頁、二〇〇二年八月二十三日第一刷発行、定価九〇〇〇円(税別)〕

中村 禎里 著

『中国における妊娠・胎発生論の歴史』

本書は中国の妊娠・胎発生論の歴史について述べたもので

ある。構成は「第一章 戦国時代秦漢代」「第二章 六朝隋唐代」「第三章 五代宋金元代」「第四章 明清代」「終章」付論としてインドの仏教経典における受胎・胎児発育論について述べており、「第一章 受胎と識・中有」「第二章 胎児の発生」となっている。

本書を開くとまず、妊娠について扱った書の多さに驚く。果たして目に見えない胎児の成長をどのようにとらえていたのだろうか。その疑問に最初に答えてくれるのが、第一章の「戦国時代秦漢代」である。本章は当時の気の觀念を中心とした生命発生論に言及するとともに、「胎産書」「管子」の胎発生論にも触れている。「胎産書」の胎発生論は、妊娠期間の十ヶ月を各月ごとに記している。記述は詳細で、血・筋・骨といった身体器官がいつできるのかも書かれている。もちろん実際の発育過程とは異なるが、だからこそ当時の人々の思考が読み取れるとも言えよう。第二章からも時代ごとに胎発生説を詳細に分析している。およその胎発生説は『胎産書』から受け継がれていることがわかる。ただし、「胎産書」の記述はそのまま受け継がれていただけではない。各書成立当時の思想、社会の影響を受けながら、発展・変化を遂げていく。六朝隋唐代成立の各書に出現した胎発生論は道教経典の影響を受けているものや、『素問』『靈樞』の影響を受けているものなど様々で、お互いが関連しあう部分もあるという。また隋代成立とされる『五臟論』には、流産・墮胎による胎觀察に基づくと考えられる記述が出現している。第三章で述

べているが、『太平御覽』に記載された『文子』の胎發生論の注にも、実際の知識によると考えられる記述がある。胎觀察の記録はないものの、流産などで胎児を見ていた可能性は確かにあるだろう。一方で五代宋金代は運氣論や仏教の影響も大きかったようだ。

私たちは十月十日という時間を、母親の胎内で過ごしてきた。数百万という数の精子の中から選ばれたたった一つが卵子と出会い着床する。着床したばかりはただの細胞の塊であった私たちは、約二八〇日という時間をかけて、生まれる準備をしていく。神秘的な胎児の成長をどのように捉えてきたのか、その歴史が本書には記されている。

(鈴木 千春)

〔思文閣出版社、千六〇六一八二〇三京都市左京区田中関田町二一七、電話〇七五—七五—一七八一、二〇〇六年三月二五日、A五版二四七頁、定価二八〇〇円(税別)〕

三枝 純郎 著

『肛直外科迫害史』

この本の著者はJ R 静岡駅の近くで開業しておられる。標榜は表紙にあるごとく、大腸排便科であるらしい。最近、横浜で標榜科目に「乳腺」を入れたところ、監督官庁から厚生省が認可した標榜科目の中に乳腺はない故これを削除

せよと命じられ、不満であると裁判をおこしたが決着は一八年秋にはついていない事件があった。そのさ中にこの本を手にしたからまずドキツとした。

「肛直外科」という名称は、一般にいう直腸肛門科であるのだが、著者によれば日本語の中の「痔」と「肛門」は侮蔑羞恥語の最たるもので、これがあるために患者さんの原始的羞恥心が、どれほど無意味に煽り立てられ、これまでは何人の直腸や大腸ガンの方が早期受診の機会を失い、致命的結末を迎えざるを得なかったか。こういう現実の中で外科技術の進歩により、早期受診さえすれば、これらのガンは殆ど死ぬことがなくなった。よつてまず第一に「痔」は廃止・抹殺、「肛門科」は「下部消化器科」又は「大腸排便科」と改称が必要である。第二に、改称に当って患者さんに国際的な学識を得てもらい、マスコミ等の妄言などに翻弄され騙されない正しい理解を得てもらいたいとして本書を執筆された。

「尻の穴も身のうち」と冗談めかして笑いながら話すのではなく、「ヒトがヒトである限り最後まで付き纏うお尻の病氣」を正面から衆知してもらおう、そのために本書は書かれており、大変な啓蒙となっている。

ここに目次をかかかって大要を案内する。

・第一章 序

・第二章 肛門とは何ぞや